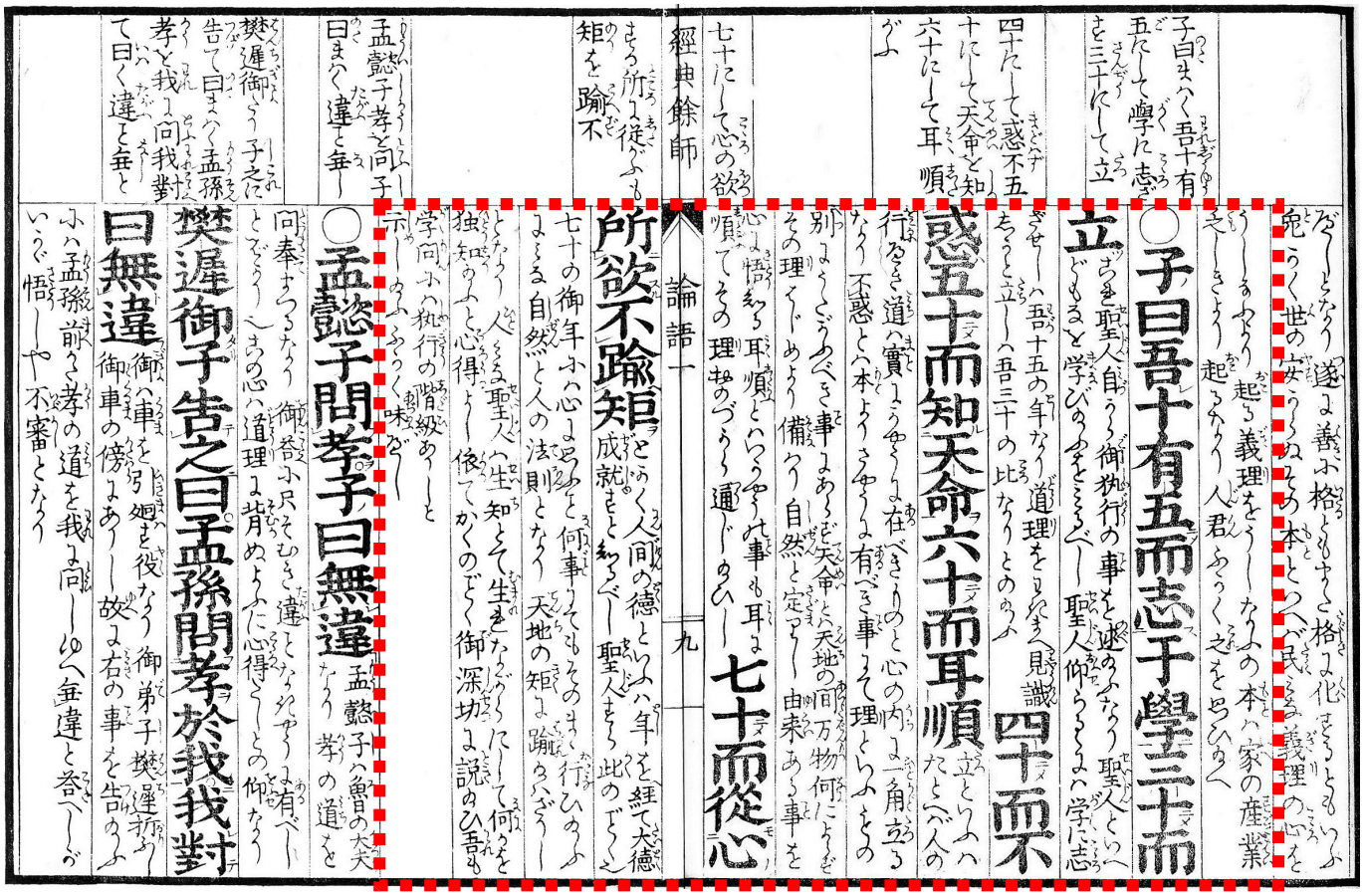
【聴楽021】藩主が綴った人生70年の計 ―――― 小泉吉永

『論語』為政篇


○子曰吾十有五而志于學三十而立
四十而不惑五十而知天命六十而耳順
七十而從心所欲不踰矩
○孟懿子問孝子曰無違
樊遲御子告之曰孟孫問孝於我我對曰無違

■あなたの理想とする「人生80年の計」は？

50代……

60代……

70代……

80代……

●宋・朱新仲の「五計」 ＊「五計」は貝原益軒作、正徳2年（1712）刊『家道訓』で広まったと考えられるが、益軒は「五計は誰もが実行できる計（はかりごと）であり、これが実行できない者は怠慢で、生きる力を持たない人間だ」と述べる。

10代　「生計」＝ 父母の教え に背かずに生きる

20代　「身計」＝ 学問・諸芸 を身につけ、身を立てる準備をする

20-40代　「家計」＝家業を営み、家を保つ

50代　「老計」＝子孫を世間に通用するように育てる

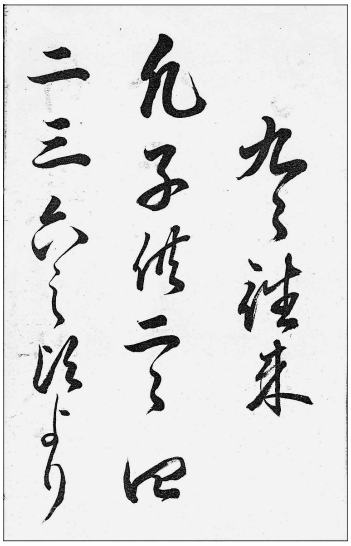
60代　「死計」＝死期に臨んで後悔しないように死後の準備をする

＊土屋巨禎の「死計」＊寛政6年（1794）刊『家業相続力艸』。

子孫が相続し、家が長く繁栄することを願うなら、陰徳を積むことが大切。心に仁を保って善い行いをし、神仏を敬って先祖を祭り、貧乏人には支援し、飢えた者には施し、年寄りを助け、幼児を可愛がり、病人をいたわって、他人の過ちを諫め、みだりに生き物を殺さず、落とし物は持ち主を探して返し、そのほか、薬を施し、道をあけるなど小善を努めて怠らなければ、家業繁昌や子孫長久は疑いない。

●理想的な商人の一生――『九々往来』

＊幕末～明治初年に会津地方で使用された往来物。句読点含み約340字。



凡(およ)そ子供二々が四、二三が六の頃より行儀を教え、二四が八、二五十より手習い・学文に遣(つかわ)し、二六十二、二七十四迄厳敷(まできびし)くいたし、二八十六、二九十八より商売見習いに外へ遣し置き、三三が九、三四十二、三五十五、三六十八、三七廿一、三八廿四、三九廿七の頃迄人中(じんちゅう)に差し置き、四々十六、四五二十、四六廿四、四七廿八、四八三十二、四九三十六の頃手元へ引き取り嫁をとり、五々廿五、五六三十、五七卅五、五八四十、五九四十五より商売に他国へ遣し、六々三十六、六七四十二、六八四十八、六九五十四より宿に居り、七々四十九、七八五十六、七九六十三にて安堵の隠居振舞いも賑々敷(にぎにぎし)くこれを相済まし、八々六十四、八九七十二、九々八十一、老いの楽しみに名所旧跡見物し、実(げ)に此の上や有るべきと万々年も栄え給うべし。穴賢(あなかしこ)。

●大名が示した人生70年の計――『初学文宗』

＊尾張藩初代・徳川義直が死去直前の慶安3年（1650）に著す。翻字は明和6年（1769）写本（白木興常重写）による。

（序文）

夫(そ)レ学ノ事ハ難(かた)キニアラズ。人生ノ日々ニ用ヒ行フ処、是皆学ノ道ナリ。今ノ人、此理ヲ知(しる)者少シ。学問ト云ヘバ、愚ナル者ノ成(なす)ベキ事ニアラズトテ、聞(きく)ベキ事トモセズ。故ニ愚ナル者ハ弥愚(いよいよ)ニシテ道ヲ知ル事ナシ。我、是ヲイタミ思フ故ニ、人初テ生レシヨリ七十以上マデノ間、心ヲ正シ身ヲ修メ、国家ヲ治メ、其外(そのほか)、官職・礼法・軍旅・葬（祭）ニ至(いたる)マデ仮名ヲ以テ是ヲ書付ケ、一巻ト成シテ是ヲ『初学文宗』ト名付ク。蓋シ初学ノ人ヲシテ大道ノ一端ヲ知(しら)シメント思フ心也。

（本文要旨）

妊娠中……行住坐臥(ぎょうじゅうざが)に気をつけ、珍しい物や怪しい物を食べず、怪しい色を見ず、淫乱の音を聴かず、心を動揺させず、夜は正しい詩や道理にかなった物語を聴く。

1-5歳……怪しい物や淫乱な音を見聞きさせない。淫乱な歌を禁止し、右手を使うことを教える。

6-10歳……怪しい物語を聞かせず、怪しい物を食べさせない。数字や読み書きを教える。

11-15歳……弓馬の道を教え、学問をさせる。人と争わず、傲慢な心を戒め、淫乱を堅く戒め、礼法を習わせる。父母への孝、主君への忠、朋友への信を教え、家臣の使い方を教える。

16-20歳……衣服を飾らず、正直者と交際し、邪佞(じゃねい)の人に近付かない。奇怪を好んだり、古来の教えを批判したりすることを禁ずる。特に禅宗の信仰を禁ずる。（中略）血気盛んな年頃で些細な事から過ちを犯しやすいので気をつける。遊山翫水(ゆさんがんすい)の楽しみ、人を翫(もてあそ)ぶこと、酒の多飲を禁ずる。

21-30歳……身を正し、道理を弁え、人の言葉を吟味し、悪へ近づかぬように気をつけ、善言を真摯に受け止め、人の諫めに腹を立てない。とにかく善悪の弁えに徹し、私欲・物欲・人欲に心奪われぬようにせよ。

31-40歳……万事一通り学び終える年代のため、必ず傲慢の心が生じる。高慢の心を抑え、ますます道理を悟って身を修めよ。

41-50歳……人生の盛りなので、十分に慎み悪名を取らぬように注意せよ。

51-60歳……老年に入っても学問を続け、一事・一言でも人の教えを学ぶように心懸けよ。

61-70歳……物事に差し出がましくなり、時代に合わない事を言い張りがちなので十分慎む。物忘れしやすいので国政に関わってはならない。君主の命令ならば、老い耄(ぼ)れている点を十分弁え、慎重に行動せよ。七〇歳は公職を辞退すべき年齢である。

聞イルヘシ殊ニ人ノ諫ヲ聞テ心ニ不叶トモ怒心事ナカレ善悪ヲヨク見知事ヲ専用トシカモ私ナク物ニヒカサレ人欲ニヲヽロルヽ事ナカレ

一三十一歳ヨリ四十歳マテ凡此年ニ至テハ萬ノコトヲ大形學ヒ得ル事有故ニ必慢キノ生スル事有ルモノナリリコラ能分別シテ高慢ノ心ヲオサヘ弥道ノ理ヲ悟リ知テ身ヲ脩ムヘキナリ

一四十一歳ヨリ五十歳マテ人ノサカリナレハ能慎テ悪キ名ヲ取ル事ナキ樣ニタシナムヘシ年四十而見悪焉其終也ト古語ニモ見ヘタリ

一五十一歳ヨリ六十歳マテ年老タルトテ學ノ道ヲ廢ヘキニアラス一學一言ヲモ人ニ問ヒ聞ントヽ思フヘシ故ニ四十五十而無聞不足畏而已ト古語ニモ見ヘタリ

一六十一歳ヨリ七十歳マテ年老テハ必物ニ指出タキ者也其事ヲ不知シテ血氣衰タル故ニ時ニアワサル事ヲ強テ云宣戒サランヤ七十ヨリ上ツカタノ者ハ老耄シテ事ヲ忘ルモノナレハ必ス國ノ政ヲトル事ナカレ若君ノ命ニ依テ政ヲトラハワカ身ノ老耄シタル所ヲ顧テ慎テ行フヘキ也又古語ニモ大丈夫七十而致事トアリ致事トハ其職ヲ君カヘシ奉ルソ

孝行之事

夫孝行ハ父母ニツカフマツルヲ本トス故ニ父母在ス時ハ遠クアリカスアリ時ハ必告知シムヘシ子曰生ルニ

『初学文宗』『和俗童子訓』『小学』の年代別教育論(教育内容)

年 齢	**初学文宗** 1650年	**和俗童子訓** 1710年	**小　学** 1187年
1-5歳	【1-5】怪しき物・淫乱な音の禁止／右手使用	【1-5(男女)】善事を見聞きさせる／好みや習いを選ぶ／淫欲・淫楽・浪費・無益な遊芸の禁止(無害な遊びは自由)	【1-5(男女)】子守・侍女等の吟味／右手使用／男女に適した返事
6-10歳	【6-10】怪しき物語・怪しき食物の禁止／数、読み書き	【6(男女)】数・方角／素質により6～7歳より仮名の読み書き、往来物／尊長への礼、尊卑・長幼の別、言葉遣い	【6(男女)】数・方角
		【7(男)】男女の別(席・食器)／礼法、仮名の読み書き、読書 【7(女)】仮名・漢字、古歌(風雅の道)／初めは名数・短い語句、その後『孝経』首章、『論語』学而篇、『曹大家女誡』等の読書	【7(男女)】男女の別(席・食器)
		【8(男)】礼儀(起居振舞、尊重・客への応対、応答・言葉遣い、給仕方、食礼、茶礼等)／門戸出入・着座・飲食時の年長者への礼／わがまま禁止／漢字(真書・草書)／習字(能書による指導・大字から練習／短い語句の暗誦／才能により8～14歳で「小学」「四書」「五経」等の読書	【8(男女)】礼儀／門戸出入・着座・飲食時の年長者への礼(徳行の初歩として長者への謙譲)
			【9(男女)】月日の数え方
		【10(男)】外師による五常・五倫の概要、聖賢の書／10歳から『小学』『四書』『五経』の読書と文武の芸 【10(女)】家庭内での紡績・裁縫／小歌・浄瑠璃・三味線等禁止／風雅の道	【10(男)】外師・下宿による文字・算術・作法／絹服禁止 【10(女)】家庭内で女師による温和・柔順(婉娩聴従)の躾／婦功(紡績・裁縫)・祭祀・礼の補助
11-15歳	【11-15】馬術・弓術／学問による徳性涵養(人との争い・慢心の禁止)／淫乱禁止／礼法／忠孝、朋友の信、家臣を使う道		【13(男)】音楽・詩の読誦、勺の舞
		【15(男)】義理中心、修身・治国の道 ＊20歳迄に『小学』『四書』等の大義に精通	【15(男)】象の舞・馬車御法 【15(女)】成人(笄着用)
16-20歳	【16-20】華美な衣類の禁止／正直者との交際(邪佞の人を避ける)／奇怪事・邪道・禅宗の禁止／遊山翫水・飲酒の制限	【20(男)】幼心を捨て、成人の徳に従い、広く学び、篤く行う	【20(男)】元服／成人の礼(生活規範・国法・慣習法)／大夏の舞／孝弟実践／知識・見聞の吸収 【20(女)】結婚(喪中なら23歳)
21-30歳	【21-30】身を正し理を明らかにする／人の言葉を吟味し悪事を避ける／善言・諫言に従う		【30(男)】結婚／公務担当／自由に学び、良友と交わる
31-40歳	【31-40】慢心抑制／道理を悟り身を修める		【40(男)】仕官(政治に関与)
	【41-50】悪名を取らぬように注意する		【50(男)】一官の長に任命される
51-60歳	【51-60】学問を継続		
61-70歳	【61-70】差し出口・不適切な発言禁止 ＊70歳で公職辞退		【70(男)】官職を辞し隠居

○『初学文宗』の教育論の特色は？

●『四徳配当抄』の人生設計――5×3（始中終）×4（元亨利貞）＝60年

四徳配当抄

【作者】辻慶儀（忠郎兵衛）作。

【年代等】天保9年5月作・初刊。［京都］著者蔵板（施印）。

【備考】分類「教訓」。幕末京都の富商下村家の一流。井上家に仕え、「節倹恭慎」の正直な商法で財をなした辻忠郎兵衛が天保9年（1838）、77歳の時の著作。天の働きの世におこなわれる有様を、**元・亨・利・貞**※の四徳と名付け、それを商人の1日、1年に当てはめて心のあり方を諭した教訓。具体的には、人生60年を元・亨・利・貞の四徳に即して15年ずつに分け、さらに「始・中・終」に3分割した5年毎の生き方を説く。本書を含め、同じ作者が天保年間に順次施印した「幼童庭訓の著述」四本をまとめた、宇喜田小十郎編、明治7年序・刊『〈辻忠郎兵衛著述・宇喜田小十郎校正〉立身虎之巻』4巻本（1巻「教訓いろはうた」、2巻「養生女の子算」、3巻「仁術歓心抄」、4巻「四徳配当抄」）に収録、再刊された。

※元亨利貞＝易経で乾（けん）の卦（け）（算木に現れる種々の象）を説明する語。「元」を万物の始、善の長、「亨」を万物の長、「利」を万物の生育、「貞」を万物の成就と解し、天の四徳として春夏秋冬、仁礼義智に配する。

（本文要旨）

5歳まで……父母と付添人で子の善悪が決まる。子供に怪我をさせないのは当然だが、そのほか、親が奢らないことが大切。宮参り・食い初め・誕生日などのお祝いには、従業員等への祝儀・心付けは世帯相応にし、ケチらない。逆に、我が子の衣装を立派にするのは親の奢りで、子供に奢りを教え込むようなもの。親がよく慎み、質素を守り、何事も仁心で接し、殺生しないように心掛ける。

10歳まで……子供が智恵付く時期で、癖の多くはこの時期に決まる。姑息の愛をせず、厳しくして長幼の礼を正し、行儀を教える。主人同様に父兄に仕えさせ、奢りを省き質素倹約を旨とする。決して打擲（ちょうちゃく）（体罰）をしてはならない。6、7歳からは質素な服を着せて手習いをさせ、8歳からは読書・算盤を稽古させる。10歳までは行儀・手習い・読書・算盤の4つが昼夜の業である。

15歳まで……「生涯の落着」、すなわち一生を決める大切な時期。的を射る矢のように、射前のわずかの狂いが矢先の大きなズレになることをよく肝に銘じる。我が子を奉公人として扱い、合い間に手跡・読書を習わせ、謡を少々嗜ませる程度で、それ以外の遊芸は無用。14、5歳からは家業に専念させる。

20歳まで……志を一心不乱に貫き、繁栄する時期。天理に従って尋常に行動し、謙って高ぶらないことが重要。

25歳まで……孝悌・礼節を心掛け、家業を専らとして勤める。この時期は中だるみになりやすいので、他のことに心を奪われて生涯を誤らぬよう、身贔屓・身勝手を慎めば万全。

30歳まで……人生の半ばで、日常的なことは一通り分別がつく年代。家業に専念してこれを広げ、身代の見通しを立てる。

35歳まで……何事も真摯に反省し改める。30歳までにしてきたことを一つ一つ再点検して、過不及の誤りを正し、不義を戒め、妄りなることは改め、身代を堅固に保つ。

40歳まで……35歳までの自分の欠点を補い、義を専らにして人倫を厚く行い、人の和を失わぬよう努める。

45歳まで……40歳以後は徐々に衰える年代。心・身・食の3つの養生を心掛ける。また、後継者の育成に力を入れる。

50歳まで……物事成就の年代。この年代を成就と考えず、それ以上を望むのは欲であり、寿命の毒。長寿を願うなら、小欲に徹して不相応の考えを起こさぬが良い。

55歳まで……実直な子供を跡継ぎにし、自ら後見人となる（ここは極めて重要）。「生涯の片付き」の時期として陰徳を施し、人の和を保つ。

60歳まで……家事万端を繰り返し、過ちを改め、家長久の基をたてる。心残りや心配がないように努め、還暦後も永く天命を保つ。ここまで来れば「生涯の詮（生き甲斐）」があったと言えよう。

○元亨利貞の四德を
一章に御ふ配當
すべき年ふ四
季のあるべく
行時も時刻を
失ひと紀い紀
づさ時ふ紀さ
働つさ時い働さ
樣づきさきい樣

○三十六歳より四十歳までと利の中ニ十ノ三十歳
までの関帰るを傷痛して義をもつて
人倫の道を厚くすべし人和を失ふるなるを
利の中乃心得なり
○四十一歳より四十歳までと利の終ニ知
四十歳を終日ぞ陽気消滅ふ衰へ年相なり
しかるに年とて大きなる免ふ角ニ種の
農生あるべ二種とふんと分と食なり去の
書生と学べ永孫目お續の心

○三十一歳より三十六歳までと利の始ニ利の運
なり成熟ふしなり又利を熟もつ人なり
物事を改く急ぎ二十歳まで家
免ふ仕事るを一くふ石綱く過ふ及の程
を紀く祀義といまし め安なるを改ふ免代を
堅固ふ保ん事を推奨ふ賢者い利く物ふと
あるふ合しべく又利の徳を義なり義い宜
うくるる寄叶ふなり

続くと定むべし

○四十六歳より六十歳までと貞の始より千貞に

至るまで相半ばの処なり半福と相絶とをつぐるに

欲なり欲は寿命の毒なり命を保ん事を

思へば欲を断ずべし招福は無欲人

事なるべき貞の法なり脩なり

○六十一歳より七十歳までと貞の中より

定まる実貞のみあるべき名誉を獲べき自然に福

を生ずべし是招福の初なるべし生涯の行状に

陰徳なるべし人和を先に事なるべし

○六十六歳より六十歳までと貞の終より生涯に事

より千万の先なる家事百端を繰返し

を招ひあるべし家長久の基をそなへもし

末の仏道のうきよう安心し遠離後長く

天命を保べし生涯の法有と

いへり

○右件書に人に天恩を思ひ金銀財宝

などの終に移り換居するのみなるべき安心

四德 八

の事なり長久家に先祖の観雖を忘却して日々

虚気と言へる孫の笑となる相養なるべし

言葉の不善の大なるものなり過て改ざるは

事なり朝に明日を待ず改て天恩を恐

く遠居をつとめ富をいとめ者弟を先に

家業を分て後に孫の客とせざる遠慮又

情実をつくして不義相川情あるべし業の

湯後独理三味線などをもて孫の笑言と

なるべき作時もまた速に改らるべし掛る

風もなきうちに世を閑に明さとろへ出る

ごとく仏魔と安心して長久の基と為べし

天保九戌年春月　　辻慶儀述